

人々の対話の場を形づくる「情報デザイン」

多摩美術大学 情報デザイン学科 教授 須永剛司 SUNAGA TAKESHI

人とデザインの関わりで不可欠な「情報デザイン」という考え方、分かっているつもりでも、言葉ではなかなかうまく定義できないその領域について、情報デザイン研究の第一人者である須永剛司さんに聞いた。

人々の生活に合う形やしくみをつくる

情報の道具やサービスのデザインを例に考えてみます。よく、ルック&フィールだけがデザインではないと言われますが、その通りで、デザインされる色や形にはすべて論拠というものがあります。ところが、大学でも専門学校でも、まず教えるべきは造形ということになり、その論拠は二の次。多摩美術大学では、美大が進化するために、いち早くこの論拠を学ぶことのできるカリキュラムを組みました。それが「情報デザイン」という領域です。

世の中のクリエイティブの思考を分析してみると、その形を決定するプロセスには必ずこの論拠の明示と交換が有効に働いています。ところが逆に、デザインを学ぶ学生たちに、最初にその論拠を教え込んでしまうと、突出したクリエイターが生まれてこないという現実もあります。表現力が論拠を牽引することがクリエイティブなのだと思います。しかし論拠を扱うことが重要であることに変わりはありません。

「情報デザイン」と聞くと、ITにばかり意識が行きますが、実際は人間の認知、思考、言語というパラダイムをベースにする、人々の言葉の営みに一番近いデザインです。デザインにおけるそのパラダイム拡張はコピー機にマイコンが搭載されたところから始まりました。それまでのデザインでは、身体をもつ人間の形や動きを論拠に、「使いやすい」プロダクトを形づくることができました。ところが、そこに人々と対話するプロダクトが登場します。コピー機ならこんな対話が起きました。「サイズを決めるって、原稿のサイズなの？コピーのサイズなの？枚数を決めてスタートしただけ、ちょっと途中で止めたいのには…」これは「分かる」という新たなデザイン問題でした。これらに対して、いったんどのように答えを出せばよいのか？とデザイナーたちが「悪いはじめたのです。1980年代の前半です。コンピュータを組み込んだ家電が増え、工業デザイナーがそのデザインに傾き、

アメリカでは「認知科学」という学問分野が生まれ…という時代。「人間の思考と認知に合う形やしくみ」を考える学問として多摩美に初めて「情報デザイン」のプログラムを開発しました。当時はまったくの新ジャンルで、実験的な取り組みでしたが、今や企業のデザイナーの半数以上がユーザーインタフェースなどソフトウェアと人間の対話を扱う情報デザイナー。人とモノ・コトをつなぐデザインの論拠を明示することの大切さがますます重要になっています。



須永剛司先生
多摩美術大学 情報デザイン学科 教授 須永剛司先生
東京大学大学院 工学系研究科 情報デザイン学専攻 准教授 須永剛司先生
日本デザイン学会 理事 須永剛司先生
日本情報デザイン学会 理事 須永剛司先生
日本デザイン学会 理事 須永剛司先生
日本デザイン学会 理事 須永剛司先生

これから始まるデザインは「社会駆動型」

人間の身体を造形の論拠にするプロダクトデザインから、思考と認知を造形の論拠にする情報デザインへ拡張してきましたが、私は、これからデザインはさらに社会に直接に関わっていくと考えています。そこに必要なのは新しいデザインのプロセスです。これまでは「売れる」ことを目指した産業資本駆動型のデザインが中心でしたが、今後は、「社会駆動型のデザイン」が開拓されていくはずです。それは、創り出されるモノ・コトが本当に使われるために、社会の中で、使う人々を巻き込んでいくデザインの方法です。

フィンランドでこんな話があります。ヘルシン

キに住む50代のカップル50組が住む共同住宅の設計を、ある建築家グループが頼まれた。住む人々のライフスタイルを想定して何案出しても、なかなかゴースサインが出ない。そこで、彼らの生活を構成するコミュニケーションのしくみから考えてみようという情報デザインの研究グループが参画。そして、重要なのは、住空間の作りだけではなく、共同サウナやランドリーの予約方法をはじめとする、居住する人々の対話のしくみの組み立てであることに、住民とデザイナーたちが徐々に気づいていったようです。その過程で、50組のカップルが「自分たちでもデザインをしてみよう」という決意が生まれたというのです。建築や情報のデザイナーたちの本場の役割は、人々が彼ら自身の生活をデザインできるコンテキストをつくることにあったと言えるかもしれません。これは長期スパンで社会が変化する、これから始まるデザインのイメージモデルと言っていいでしょう。

私のCREST研究室(※)では、人々が日常生活を楽しむための表現の場(プラットフォーム)をつくる研究をやっています。道具をデザインする前に、その論拠となる、人々の日常的な表現活動の本質をつかむ。たとえば、自身の手帳を改めて詳細に観察することから無意識に行っている予定や記録やそれらのマネージメントにおける表現とその再利用のしくみを発見しています。また、小中学校の国語や総合の授業に参加し、子ども達が、知識をインプットすることによって、知識の元となる事象をスケッチで表現してみる、アウトプットしてみるワークショップをやっています。そこには「深く分かる」という興味深い成果が生まれています。

情報デザインは人々の対話の場のデザイン、日常の経験の中に、コミュニケーションの可能性空間を造形するさまざまな理由が埋まっているのです。(調)

※CREST(Research for Evolutional Science and Technology)の場、社会技術情報機構(STI)が提供する国の戦略的創造的課題の拠点の一つ。

Information

「図」と「地」で描くワークショップ: 未来館でみつける未来 7月26日(土)・27日(日) 10:00~16:30 日本科学未来館(東京都江東区)

「図」と「地」で描くワークショップ: 未来館でみつける未来 7月26日(土)・27日(日) 10:00~16:30 日本科学未来館(東京都江東区)

1枚の伝票が、コミュニケーションを変える

葛西薫 KASAI KAORU + 平林奈緒美 HIRABAYASHI NAOMI



編集部では今回の特集を進める中で、以前からこうしたフォームやツールに高い関心と厳しい視点を持つ平林奈緒美さんに、ぜひ意見を聞きたいと思いました。日本で使われている届け出や伝票類のどこが良く、どこが良くないのか、社会や公共で使われるデザインを見直してみたいと思ったのです。そして対話を行うにあたり、平林さんからお相手として推薦いただいたのが葛西薫さんでした。以前に「時刻表が好き」と話していたこと、また表組み、文字については日頃から厳しい視点を持っている葛西さんゆえに、こうした類のデザインに対する意見や考えを話していただけるのではないかと、平林さんと編集部のそんな考えから、葛西さんに参加いただくことになりました。そして今回、お二人がこれまでに世界各国で集めたコレクションを見ながら、本当に見やすい、そして使いやすいデザインとはどういうものなのかを考えてみました。

文字を大きくすれば読めるというのは短絡的な発想

平林 私は以前から、常々不思議に思っていることがあるのですが、それは、いろいろな仕事で年配の方のために字を大きくしてほしいと言われることなんです。たとえば区役所が発行するペーパーって半端に字が大きいので、これは日本独特だと思うんです。

葛西 老眼の償からすると、それはあまり意味がないことで、10ポイントのものを12ポイントにしてもいいし変わらない。50ポイントでも大きくするなら別だけど、どっちみち目を近づけないと読めないものに対して、「大きくすべきだ」と決めつけているところがありますね。それゆえにデザインが開れて、むしろ読みにくくなっている。「伝えよう」と真剣に考えるなら、文字そのものではなく、文字と言葉の環境を整えるべきなのに。

それから、先日あるポスターで見ましたが、

文中のある言葉を強調したいために本来カタカナの言葉を平仮名に変えた上に、書体も字間も変え、さらにその言葉を括弧でくくり、強調に強調を重ねていたんです。その無神経さがすごく気になってしまって、よく仕事でもここを太くしてください、赤くしてくださいと言われることなんです。たまたま区役所が発行するペーパーって半端に字が大きいので、これは日本独特だと思うんです。

平林 役所の伝票をこうして見てみると、文字を大きくしたがゆえに、行間が詰まってしまっていて、逆に読みづらいものが多いですね。葛西 たまたまアルコール飲料の広告には「飲酒は20歳から」などの文字を入れるのが必須で、そのサイズが決まっています。それが実に大きい。大抵のデザイナーはそれかいいやだから、色を薄くしたり、見えにくくしたりする。指導組合が大きくなるとすればするほど、デ

ザイナーが目立たなくさせてしまうという人たちこの状態が起きている。もちろんデザイナーにも悪いところがあるけれど、入っているルールを作る側の単純な発想がむなしなと思って。大声であれこれ言われたら、何も聞てこないですよ。それと同じ。

平林 欧米のように小さい頃から自分の責任で生きていくことを教えられていると、そういうことに対する意識も違うのかもしれないですね。例えば日本人って信号が青になれば当たり前のように渡り、赤だとか車が1台も来ないのに渡る。でも欧米の人は、その場の状況をきちんと自分で判断して行動するんですよ。

葛西 そういう判断ができる方がいいし、合理的というか、人の知恵や判断の力を信用していると思う。もともと合理性を目指しているのに、なぜか不合理な感じになってしまっているんだよね。